

2021年 第64回

日教組九協青年教育労働者の集い（熊本の集い）

平和教育

～ 長崎・特攻兵器の歴史 ～



日本は世界で唯一、原爆を落とされた国であり、長崎県は原爆を落とされた2県のうちのひとつである。「長崎県民は、被爆の歴史を伝え続けなければならない」という意識は、県内の多くの教員がもっているだろう。

しかし、長崎県の戦争の歴史は、「被爆の歴史」だけではない。魚雷を製造した工場や、各地から集まり訓練を受け、特攻隊員として命を落とした人々が存在したという事実。長崎県・川棚の地で、平和教育について考える。

平和と民主主義 A

分科会

4

長崎県教職員組合青年部

1. はじめに

今年は戦後 76 周年、被爆 76 周年となる。8. 6 広島原爆の日、8. 9 長崎原爆の日は、平和教育における一つの節目として、「平和の誓い」「不戦の誓い」「あらゆる兵器の廃絶の誓い」の日でなければならない。長崎の平和教育は 1970 年から、原爆を原点として始まり、長崎県教組の組合員による教育実践を中心に県内各地へ広がり、今では 8 月 9 日の平和集会を各学校に定着させるに至っている。

一方で、近年、組合員数の減少により、地域によっては平和教育に対する意識が低い教職員が増え、平和教育の形骸化が進んでいることが課題となっている。また、平和教育が原爆のことや戦争の歴史教育に終始し、兵器生産や他国からの強制労働者に対する戦争加害の歴史、現在行われている平和に向けた活動などを扱うような視野の広い教育が充分なされていない学校もある。命と自由が保障される平和な社会を維持するためには、私たち教職員が原爆・戦争について自ら学び、現在から未来を見据えた教育を行う必要があり、そのために私たち長崎県教組青年部は、コロナ禍の中でもできることを検討し、活動してきた。

今回は、長崎県の川棚町にある訓練所で使われていた特攻艇「震洋」に関する学習会について報告するとともに、各県における平和教育の実態や組合としてのとりくみ等を交流することで、平和教育をどのように構築していくべきかを討議したい。

2. 県青年部学習会での学び「ナガサキ平和フィールドワーク(2021.3.14)」

長崎県教組三海総支部大東支部長である中浦美喜人さんに、長崎県東彼杵郡川棚町にある、特攻艇や魚雷にまつわる戦時遺構を案内していただいた。

もともと 1 月に予定していた学習会だったが、新型コロナウイルス感染症の影響で延期することになった。その後、県内感染者が減ってきたことや、学習会の内容が屋外での見学をメインとしたフィールドワークであったこともあり、手指の消毒やマスク着用といった感染症対策のもと、学習会を実施することができた（図 1 は学習会のチラシ）。

○特攻艇「震洋」と特攻兵器「伏龍」、「回天」について

特攻艇「震洋」とは、船の前の部分（船首）に 250 kg の爆装を施し、トヨタ自動車エンジンを搭載した高速ボートのこと（図 2 はレプリカ）。乗員 1 人の I（いち）型と乗員 2 人の V（ご）型があり、乗員の操縦によって敵船に体当たりし、撃沈させることを目的に作られた。



**ナガサキ
平和フィールドワーク**

日時 2021年3月14日(日) 10:00~12:00
集合場所 特攻殉国の碑 資料館前(駐車スペース有)

<コース>

- ① 特攻殉国の碑及び資料館
- ② 魚雷発射試験場跡
- ③ 川棚軍港工廠跡
- ④ 城山公園

<ガイド紹介>

中浦 美喜人さん
(長崎県教組三海総支部大東支部長)

川棚町内の戦争遺構を中心に地域教材を資料とした平和教育を実施してこられた先輩です。現在も再任で小学校教員を続けておられます。戦争や歴史についての知識を得るだけでなく、「自分たちの身近なところから平和や戦争について考える」実践のヒントをいただけると思います。

『特攻殉国の碑』

太平洋戦争中、小舟に置かれた海軍特攻隊から飛び立ち、遠く南海の東に数った三千人もの隊員を顕彰する碑
(川棚町新谷郷)

時間がある方は、学習会後に『震洋城』の見学もどうぞ。
(佐世保市城間町 3-2)

学ばなければ気付かないこと、伝えられないことがあります。
みなさんの参加をお待ちしています。

主催：長崎県教組青年部

図 1 青年部学習会のチラシ

特攻兵器「伏龍」とは、潜水具を着用し、棒を付けた機雷（水中で使用される爆弾）を手にした兵士のこと。または、その兵士によって本土上陸を狙った敵船を爆破させる戦法のこと。「人間機雷」とも呼ばれる（図3）。1945年から訓練が始まり、10月末の実践投入を目標にされていたため、実践に投入されることはなかった。ただ、訓練中の事故や死亡者が多く、机上の空論にもとづいた兵器だったといえる。

特攻兵器「回天」とは、太平洋戦争の際に開発された「人間魚雷」と言われるものであり、日本軍初の特攻兵器である（図4）。魚雷の中に1人乗りのスペースが設けられており、設置された襲撃用の望遠鏡と簡単な操船装置を使って敵船を狙い、体当たりする。ハッチは内部から開閉可能であったものの、脱出装置はなく、一度出撃すれば攻撃の成否にかかわらず乗員の命はなかった。

「回天」が初めて実践に投入されたのは、終戦前年の1944年の11月だった。このような人の命を犠牲にした兵器を使用せざるを得なかった状況からも、いかに日本が追い詰められていたか、そして正常な判断ができなくなっていたかが分かる。

○資料館と特攻殉国の碑

1918年に魚雷遠距離発射場が、1943年には「日本一の水雷工場」とも呼ばれる川棚海軍工廠（こうしょう）が開庁されるなど、大村湾沿いの波静かな川棚町は海軍の兵器を扱うのに適した場所だった。そして1944年に川棚臨時魚雷艇訓練所が開設され、「震洋」や「伏龍」の訓練が行われた。この訓練所には全国から数万人の若者が集まって訓練を受け、出陣し、3,500人以上の方が亡くなったとされている。資料館にはその時の新聞記事や訓練兵の方の言葉、当時の写真などが展示されていた（図5）。

また、資料館の外には石碑があり、震洋や回天といった特攻兵器の隊員や魚雷艇の隊員など、亡くなった3,500人以上の隊員の名前が刻まれている。



図2 震洋（レプリカ）

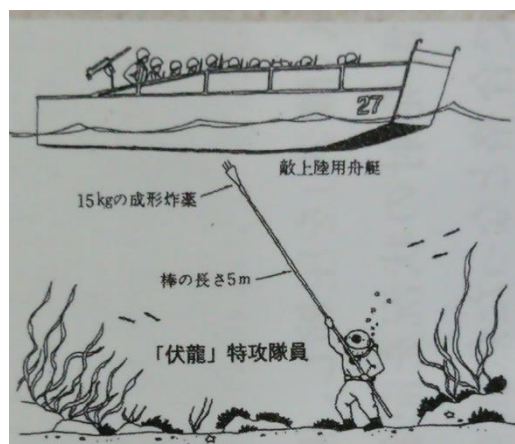


図3 伏龍

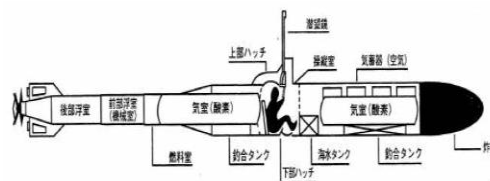


図4 回天（断面略図）



図5 資料館内の様子

○片島魚雷発射試験場跡

魚雷発射試験場は、佐世保や川棚の海軍工廠で新規製造、あるいは修理した魚雷を納品する前に性能試験のための発射を行う場所だった。観測所も設置されており、そこで計測した速度や航跡、回収した魚雷の燃費などをもとに、兵器としての合否が判断されていた。現在でも建物の一部や発射場が残されており、当時の様子をうかがうことができる(図6)。



図6 発射試験場跡

○川棚海軍工廠(こうしょう)跡と城山公園

1943年に開庁した川棚海軍工廠では、九一式航空魚雷という、航空機から海上の船舶を攻撃するための兵器を製造していた。月に30本を製造し、1000人近くの人がここで働いていた。県内だけでなく、佐賀県や鹿児島県といった県外からも学徒動員で連れてこられた少年少女がたくさんいたそうで、いかに兵器製造に力を入れていたかが分かる。

かつて海軍工廠施設が立ち並んでいた一帯は、戦後はそのほとんどの建物が取り壊され、現在は電子部品や鉄工所、住宅が広がっている。ただ、赤レンガの倉庫や防空壕など、当時の遺構が残っている場所もある。

城山公園は、時間の関係で残念ながらフィールドワークの中で見るができなかったのだが、川棚海軍工廠跡地を一望できる高台にあり「工廠の見える丘公園」とも呼ばれている。戦争の歴史を伝え残す「歴史と平和の塔」が建てられ、「戦争の歴史を絶対に忘れてはならない」という強い思いがこめられている。

○魚雷艇訓練所開設の歴史と海軍関係施設設置による川棚町の発展

1943年、南太平洋(ソロモン、ガダルカナル島)における戦いで、米国は空軍とともに魚雷艇(魚雷攻撃を主な任務とした高速小型艇)を駆使して、日本軍の補給を断つことに成功した。この反省から、日本軍は魚雷艇隊の増強を急ぐため、適地調査を行った。横須賀(東京湾)が候補地としてあがっていたが地理的条件が魚雷艇訓練には不向きだったため、その他琵琶湖など各地を調査することとなった。その結果、同年12月、波静かな大村湾沿いの川棚町小串浦に候補地を決定した。これにより用地買収・構内の民家移転・施設の建設工事が進められ、翌年5月、川棚町小串郷(おぐしごう)に横須賀の海軍水雷学校の分校として「川棚臨時魚雷艇訓練所」が開設した。

訓練所開設と同時に、第一期魚雷艇学生が入所した。この第一期魚雷艇学生(約300人)の魚雷艇訓練は7月に終わり、魚雷艇教官に残る者、水中特攻隊(回天など)へ赴任する者と、それぞれ配置についた。追いかけるように、7月15日、第二期魚雷艇学生の約400人が入所した。この時に、学生兵舎が増築され、合わせて二棟となった。

海軍で使われる魚雷などを製造する大型工場「川棚海軍工廠」や、製造した魚雷の性能を試す「魚雷

発射試験場」、そしてたくさんの学生が入所した「川棚魚雷艇訓練所」といった海軍関係設備が設置されたことで、決して都会ではなかった川棚町の開発は進んでいった。働く人や製造された兵器を運ぶために駅などのインフラが整えられ、国立病院も設置された。それは今でも残っており、住民の方々も利用している。『なぜこんなところに駅があるのか。』『なぜ川棚に国のお金で病院が建てられたのか』そういった視点からも戦争の歴史を考えることができる。」と中浦さんは話してくださいました。

3. おわりに

これまでの平和学習では、原爆資料館や被爆遺構を見て回ったり、被爆体験者の方から話を聞かせていただいたりするなど、原爆に関する学習を多く経験してきた。一方で、それ以外の学習の機会はほとんどなく、戦争に関する歴史を学習する中で少しふれる程度で、今回の川棚町の海軍工廠や特攻兵器に関して学ぶことはほぼ初めてだった。ここにもまた日本の「戦争加害の歴史」と、日本政府の方針によって命を投げうたざるを得なかった若者がたくさんいたという「被害の歴史」があることを学ぶことができた。

案内をしてくださった中浦さんは「うちの学校の先生に学習会があることを教えても、誰も来なかった。教員の関心が薄れていっているのが悲しい。」「ただ、学ぼうという人がこうして集まってくれたことを嬉しく思う。やはり自ら学ばないと子どもには伝えられない。ぜひ、これからも多くのことを学んで、子ども達に伝えてほしい。」と話してくださいました。私たちは教員で、子ども達の将来を担っているという責任がある。子どもたちの豊かな学びのためにも、「まずは自分が学ぶ」という姿勢をこれからも大切にしていきたい。

